

タイトル	やさしい日本語 から母語話者は何を学ぶか 美術展示の解説文の書き換えを通して - 美
著者	丸島, 歩; MARUSHIMA, Ayumi
引用	北海学園大学学園論集(192): 19-36
発行日	2023-11-25

〈やさしい日本語〉から母語話者は何を学ぶか

—— 美術展示の解説文の書き換えを通して ——

丸 島 歩

1. はじめに

1-1. やさしい日本語とは

「やさしい日本語」は1995年の阪神淡路大震災の際に、在住外国人が必要な情報が得られないために二次的な被害を受けたことを反省に、日本語教育や社会言語学の専門家によって構築された日本語の文体である。語彙を制限し構文を平易にすることで、日本語に習熟していない非母語話者でも自力で情報を読み取ることができるように配慮されている。「やさしい日本語」は、2007年の新潟中越沖地震や2011年の東日本大震災の際にも活用された。

その後在住外国人の増加を背景に、平時における外国人への情報提供など、より幅広い場面でこれを活用しようという動きが見られるようになった。2019年に特定技能ビザが新設されたこともあり、2012年には200万人あまりだった在住外国人は2022年に初めて300万人を超えている（出入国在留管理庁 2023）。

減災のための「やさしい日本語」と区別された平時のための〈やさしい日本語〉は（庵 2019）、国や地方公共団体からの生活情報の発信やインターネット上のwebニュースなど、さまざまな場面で広く用いられるようになっていく。さらに、知的障害者への情報保障やろう教育への活用なども提案、模索されている（安東・岡 2019, 岡 2015, 打浪 2019, 打浪・岩田 2019, 杉本 2019, 吉開 2021 など）。

庵（2016, 2019）は、〈やさしい日本語〉は言語的マイノリティの情報保障だけではなく日本社会のマジョリティ（健常者の日本語母語話者）にとっても重要な意味を持つとしている。庵（2016, 2019）は地域社会に在住外国人が増えた際に、そこに住む日本語母語話者との共通言語の候補となり得るのは〈やさしい日本語〉しかあり得ないと述べている（庵 2016: 40-43, 庵 2019: 4-5）。しかしそれには日本語母語話者が自身の日本語のコードを調整することが必要で、実現には母語話者自身の意識にかかっていると述べている。

1-2. 日本語母語話者が〈やさしい日本語〉を学ぶ意義

〈やさしい日本語〉は構造としては平易な日本語であるが、それゆえに標準的な日本語を使う母

語話者が学ぶ対象になり得ないと思われるきらいがある。標準的な日本語の漢字をひらがなに読み下すだけで「やさしい日本語」を名乗るテキストや、〈やさしい日本語〉が子どもの母語話者向けの日本語と同じようなものであるという誤解があるのは、そのような理由によるものであろう。

出入国在留管理庁・文化庁(2020)は書き言葉で情報発信する際のガイドラインであるが、そこで述べられているポイントは情報の整理や文法・語彙のコントロール、表記など多岐にわたり、「やさしく」書く際にはさまざまな配慮が必要とされていることがわかる。さらに最終的なステップである「わかりやすさの確認」の項目では「書き換え案ができれば、日本語教師や外国人に、わかりやすいかどうか、伝わるかどうかをチェックしてもらいましょう」とあることから、専門的な知識のない初学者にとって〈やさしい日本語〉の書き換えはそれほど技術的に易しいものではないと思われる。

こうしたことから、近年は地方公共団体の職員や学校の教職員、地域住民などを対象に〈やさしい日本語〉の講習会やワークショップが盛んに行われている。宇佐美(2019)でも指摘されているとおり、〈やさしい日本語〉は「社会の変化に対応しなければならない」という外発的動機によって生涯学習の対象となってきたと言えるだろう。

しかし、〈やさしい日本語〉のテクニックばかりに意識が向けられることは望ましくない。庵(2019)は「技術」よりも、「お互いさま」という気持ち」という〈やさしい日本語〉のマインドが重要である旨を述べている。また、宇佐美(2019)は〈やさしい日本語〉の学びを「「よりよく生きていくための学び」というより大きなパースペクティブの中に位置づけ直」すべきだと主張している。平時の〈やさしい日本語〉が在住外国人への情報提供のために整備されてきたことに鑑みれば、接触時の思いやりなくして〈やさしい日本語〉のテクニックは意味を成さない。また、「よりよく生きたい」という内発的動機に応えられなければ、母語話者が継続的に〈やさしい日本語〉を通して学びを継続していくことも期待できない。

丸島(2022)では2021年度の大学3年生を対象としたゼミ形式の授業内で学生が〈やさしい日本語〉での書き換え実践をした際の感想文の分析を行っているが、授業内で担当教員がそれほど明示的に言及していなかったにも関わらず、他者の立場に立つことや日本語そのものへの気づきなど、〈やさしい日本語〉で書く技術以外のより本質的な学びについても多く記述されていた。しかしこれは対象の学生の多くが日本語や日本語教育に関心があったためであると考えられ、比較的特殊な事例であった可能性がある¹。「ことばのユニバーサルデザイン」をうたう〈やさしい日本語〉は言語的マイノリティの情報保障の一翼をになう可能性があるが、それには日本語や日本語教育、多文化共生に関心のある人だけでなく、より多くの人の内発的動機に結び付けられなければならない。

¹ もっとも、地域市民を対象にした講座等においては日本語教育や国際交流に関心のある参加者が多く集まる可能性が高く、それほど特殊な状況であるとは言えないかもしれない。

宇佐美（2019）では、〈やさしい日本語〉が参加者の内発的動機を促す可能性を内包する数少ない取り組みの一つとして、福岡県柳川市などで実践されている「やさしい日本語ツーリズム」を挙げている。これは日本語を現地で使ってみたいと考えている外国人観光客に対して〈やさしい日本語〉で「おもてなし」をするというもので、その実現のために市民向けの講座が開講され、すでに多くの参加者が〈やさしい日本語〉で外国人観光客に対する接客・交流を行っている。この実践は宇佐美自身の教育実践から得られた内発的動機を促す活動の要素である、①参加者自身の人生と relevant である、②自分がやったことに対してすぐにフィードバックが得られる、③単に知識や技能が習得できるだけでなく、自己の問い直しにもつながる、すべてを含んでいる。

母語話者にとっての〈やさしい日本語〉の習得を、制限されたコード（文法・語彙）を持つ一種の日本語のスタイルの習得と見るのであれば、それは言語学習に類似したものに位置づけられ得る。そうなれば「やさしい日本語ツーリズム」の実践は、TBLT²的な〈やさしい日本語〉の学びと言い換えることもできるだろう。なお、近年の言語教育は言語形式そのものに重点を置く教授法・指導法は主流ではなく、意味内容や言語を通して何を学ぶかが重視されることが多い。〈やさしい日本語〉実践においても、第二言語習得の研究成果が援用できる可能性がある。

1-3. 本論文の目的

筆者は、市立小樽美術館で2023年3月から4月にかけて開催された特別展「やさしい日本語×美術館 やさしさとは？」（以下、「本特別展」）に関わる機会を得た。美術館などではしばしば解説文が作品とともに提示されるが、そこで用いられることは必ずしもやさしくない。美術館展示と〈やさしい日本語〉を出会わせることで、さまざまな人の集まる公共性の高い美術館という場所におけるやさしさを再考するきっかけになるのではないかという、同美術館の学芸員でアートマネジメントを専門とする山田菜月氏の発案・企画により実施されることとなった展覧会である。

筆者は、2020年度より北海学園大学人文学部日本文化学科の3年生を対象とする演習科目「日本文化専門演習」において、北海道にゆかりのある文学者や文学作品などに関する文章を〈やさしい日本語〉に書き換える活動を学生とともにやってきた。2022年度には、この演習の授業内でゼミ生とともにこの美術展示の解説文の〈やさしい日本語〉への書き換えを行うこととなった。

本論文では、この特別展の概要を概観したうえで、ゼミで学生がどのように書き換え作業を行ったかを整理する。また、実際に作業を進める中でどこに困難さがあったかという視点をもとに、本実践の特徴を具体的な書き換え例を参照しながら分析する。また、学生による年度末のふりかえりレポートの記述を参考に、この実践から学生が何を学び取ったのかを考察することとする。なお、この実践を宇佐美（2019）の内発的動機を促す活動の要素に照らし合わせて考えると、開

² Task-Based Language Teaching。学習者に特定の目的や課題を達成させるために目標言語を使わせる教授法である。

講当初は美術鑑賞に関心のある学生は皆無であり、学生自身の人生と relevant とは言えなかった(①)が、グループワークで書き換えを行うことでグループのメンバーからすぐに反応が得られる環境を確保した(②)。③(単に知識や技能が習得できるだけでなく、自己の問い直しにもつながる)に関しては丸島(2022)の実践と同様に日本語そのものへの問い直しが起こる可能性があるが、丸島(2022)の実践と本論文で扱う実践とでは学生自身が書き換えテキストのテーマを選択できるかどうかの違いがある。与えられた(しかも決して関心があるとは言えない)テーマでの書き換え実践でも同様の問い直しが起こったのであろうか。また本特別展そのものが実験的な試みであり、美術館に足を運んだ来場者に美術館の「やさしさ」を再考することを促すものであった。「問い直し」の仕掛けを作る側にまわることとなった学生たちがこの実践から何を学び取ったのかについても考えたい。

2. 特別展の概要

本特別展は、市立小樽美術館で2023年3月4日から4月23日にかけて行われた「〈やさしい日本語〉×美術館 やさしさとは?」と題された展覧会である。

大きく分けて「やさしさとは?」「やさしい日本語と美術館～新しい言葉と出会う～」の2セクションに分かれており、そのほかにやさしい日本語の資料を展示するコーナーが設置された。「やさしさとは?」のセクションでは作品や解説文が展示される位置(高さ)、解説文の配色、行間、字種、表記などを標準のものとは異なるものにする事で、美術館の展示のやさしさの再考を来場者に促す作りになっている。一部の作品では音声と字幕のついた動画での作品解説を視聴することもできる。「やさしい日本語と美術館～新しい言葉と出会う～」のセクションでは、小樽や北海道にゆかりのある作家の作品が〈やさしい日本語〉のキャプションとともに展示されている。それによって、〈やさしい日本語〉という新しいことばと美術作品を通して出会えるように意図されている。また、「やさしい日本語と美術館」のセクションの一角には小樽運河をテーマにした絵画と画家自身の娘を描いた絵画が3点ずつ展示されており、来場者同士でことばを交わして感想を共有しやすいように工夫されている。壁面にPadlet³のQRコードを掲示し、オンライン上でも感想を書き込んだり閲覧したりできるようにしたことで、一人で来場しても自分のことばを表現し他者のことばに触れられるように設計されている。また、この「やさしい日本語と美術館～新しい言葉と出会う～」のセクションには「ちがいをしる」というコーナーが設けられており、展示の高さをあえて変えた作品や文字の大きさが異なる解説文を見比べることで、自分にとっての見やすさやわかりやすさを意識するとともに、自分と異なる他者の視点を想像することが促されている。

3月11日には鑑賞ワークショップが実施された。筆者による〈やさしい日本語〉の解説のあと、

³ オンライン掲示板サービス。テキストはもちろんのこと、画像や音声、動画なども投稿できる。(URL: <https://padlet.com/>)



図1：特別展のフライヤー（左が表面）

学芸員の山田氏の案内で〈やさしい日本語〉を用いながらの鑑賞会が行われた。このワークショップには書き換えを行った学生のうち4名がアシスタントとして参加した。

3. 演習における活動

2022年度に筆者が担当した「日本文化専門演習」のゼミ生は10名で、うち1名が日本語の非母語話者である。また、2学期のみ交換留学生1名（非母語話者）が参加し、11名で作業を行った。

1学期の授業スケジュールは下の表1のとおりである。1学期は実際の書き換え作業は行わず、その準備段階として〈やさしい日本語〉への理解を深めることと、基本的な書き換えの技術を身につけること、美術作品やその解説文と向き合う準備を行うことに集中した。第2回から第5回まではやさしい日本語の概要や書き換えのための基礎知識を共有するために、文献調査等をもとにした発表をゼミ生一人一人に課した。第6回は外部講師として本特別展の企画者である学芸員の山田氏を招いて、美術館と美術鑑賞に関するワークショップを実施した。第7回から第11回まではこのワークショップの振り返りとともに、ワークショップの感想文やワークショップで用いられた作品の解説文を〈やさしい日本語〉で書き換える実習に繋げた。それと同時に、〈やさしい日本語〉の現状について情報共有をした上でディスカッションを行った。第12・13回は、特別展で映像・音声での解説を上映することを念頭に、音声言語での「やさしさ」について、ディスカッションを行った。その際、

表1：2023年度1学期の授業内容

回	内容
1	ガイダンス
2	・2020～2021年度のゼミ活動の紹介 ・発表1：「わかりやすい」言葉とはどんなものか ・参考文献の書き方
3	・発表2：やさしい日本語の歴史 ・発表3：やさしい日本語の理念 ・発表4：やさしい日本語はどのような場面で活用されているか
4	・発表5：「初級日本語」について ・発表6：やさしい日本語の語彙、表記 ・発表7：やさしい日本語の文法、構文
5	・発表8：ユニバーサルな文字、表記 ・発表9：webツール「リーディングチュウ太」について ・発表10：webツール「やさちチェック」について
6	・美術館とは、美術鑑賞入門 外部講師：山田菜月氏（市立小樽美術館）
7	・第6回の振り返り（振り返りレポートの〈やさしい日本語〉書き換え）
8	・書き換えのフィードバック ・「やさしい日本語」での災害対応について ・〈やさしい日本語〉の認知度
9	・〈やさしい日本語〉の若年層への認知度を高めるためには（ディスカッション） ・作品解説文の〈やさしい日本語〉書き換え練習
10	・〈やさしい日本語〉の若年層の認知度について（ディスカッション）（第8・9回の続き） ・作品解説文の〈やさしい日本語〉書き換え練習（第9回の続き）
11	・作品解説文の〈やさしい日本語〉書き換え（修正） ・美術館情報の〈やさしい日本語〉書き換え
12	・「やさしい」日本語の音声とは？（ディスカッション）
13	・聴解のプロセスとやさしい日本語の音声（ディスカッション）
14	・市立小樽美術館での作品鑑賞に向けた準備
15	・市立小樽美術館での作品鑑賞と〈やさしい日本語〉での感想文執筆

初級日本語学習者向けの聴解教材や知的障害者向けのニュース音声等を聴取し、聴解プロセスを理解することで議論の材料とした。第14回で準備を行ったうえで、第15回では実際に市立小樽美術館に足を運び、作品の鑑賞と〈やさしい日本語〉での感想文の執筆を行った。その際、解説文が鑑賞に与える影響を意識させるため、作品を鑑賞してから解説文を見るようにした場合と、解説文を読んだから作品を鑑賞した場合ではどのように受け取り方が変わるかについて意識するように指示した。

2学期の授業内容は下の表2のとおりである。2学期は第2回から第9回まで書き換え作業を行った。解説文の原文は学芸員の山田氏によって書かれたものである。2～3名ずつのグループに分かれてグループ内で話し合いながら、適宜「やさちチェック⁴」等のWebツールも利用しつつ作業を進めた。〈やさしい日本語〉の対象者は日本語非母語話者だけでなく、子どもや高齢

者、知的障がい者なども含まれ得るが、日本語非母語話者以外を対象とした〈やさしい日本語〉にはガイドラインと言えるようなものがほとんど存在しないこともあり、基本的には日本語非母語話者を対象としたものを想定して書き換えを行うこととした。書き換えを行ったものは担当教員である筆者が修正の必要がある箇所を指摘したり、推敲や再考を促すコメントを付したりして添削を行った。原稿の提出と添削はコミュニケーション・アプリの Discord⁵ 上でを行い、他のグループの作業の進捗や修正内容が共有できるようにした。教員による添削はそれぞれのテキストについて3～4回ずつ行った。その後、学芸員の山田氏によって再度確認・添削作業がなされ、学生との間で数回ずつのやり取りを経て、最終稿を完成させた。

表2：2023年度2学期の授業内容

回	内容
1	・1学期の総括 ・2学期のガイダンス
2～9	・書き換え作業（グループワーク） ※教員による添削（数回ずつ） ※学芸員による添削（数回ずつ）
10～11	・合理的配慮と〈やさしい日本語〉（文献購読・発表）
12～14	・卒業研究の計画（発表・ディスカッション）
15	総括

4. 本実践の特徴

書き換え作業を進めていく中で、今回の実践ならではの困難さが見いだされた。そこにこそ、本実践の特徴があると言えるだろう。その要因を大別すると、①原文の理解の難しさ、②背景知識の扱いの難しさ、の2点である。

しかし、この2点は明確に分けられるものではない。すなわち、どちらも書き換え実践者が原文の書き手と読み手をどう繋ぐかということに関わっている。語彙・言語表現の難しさや構文の複雑さだけでなく、原文の書き手が持つ専門的な知見やその背景となる知識をどう伝えるのか、あるいは伝えないという判断をするのかを、書き換え実践者が考えて選択する必要があった。

4-1と4-2では、上記の①と②について、実際の書き換え文を参照しながら具体的に見ていくこととする。

⁴ 語彙や漢字の難易度、文法、係り受け等から〈やさしい日本語〉として適切かどうかを判定する Web ツール。岩田一成、森篤嗣、松下達彦、中島明則（2015）「やさしにチェッカー」URL：<http://www4414uj.sakura.ne.jp/Yasanichil/nsindan/>（2023年8月19日閲覧）

⁵ 進捗状況の報告やファイルの共有は大学が導入している LMS（Learning Management System）でも可能だが、学外との情報共有が必要であったために外部のサービスを利用した。Slack などのビジネス向けアプリも選択肢にあったが、ゼミ生の中に利用経験がある者がいたため、Discord を採用した（URL：<https://discord.com/>）。

4-1. 原文の理解の難しさ

〈やさしい日本語〉を使う際に注意すべきポイントやコツとしてよく挙げられるのが、「ハサミの法則」と「ワセダ式」である(吉開 2020 など)。「ハサミの法則」は〈やさしい日本語〉を使う際の基本として紹介されることの多いもので、「はっきり言う」「さいご(最後)まで言う」「みじかく(短く)言う」の頭文字をとったものである。「ワセダ式」は「ハサミの法則」の「短く言う」の具体的なコツを示したもので、「わけて(分けて)言う」「せいり(整理)して言う」「だいたん(大胆)に言う」の頭文字をとったものである。長い文は構造が複雑になりがちで、日本語に習熟していない読み手や聞き手にとっては理解が難しくなる。一方で、「短く言う」ことはそれほど易しくはない。そのコツとして提示されるのが「ワセダ式」である。「分けて言う」は長い文を分割して複数の文として提示することを、「大胆に言う」は敬語やモダリティなどの細かなニュアンスを伝えるような表現を思い切って捨てることを指しており、これらは言語面での操作だと言える。一方で「整理して言う」は伝える内容を精査し、重要な情報に絞ることを指している。つまり、〈やさしい日本語〉に書き換える際には、原文の内容に手を入れざるを得ない場合が出てくる。

丸島(2022)などで行った実践では、〈やさしい日本語〉で書く前にまず標準的な日本語で書いてみるなど、どのような内容を書くかを書き換え作業者である学生自身が整理するプロセスを経っていた。小説の〈やさしい日本語〉化なども含まれていたが、まずは標準的な日本語で要約してからそれを〈やさしい日本語〉で書き直すという手順が進められた。すなわち、情報の取捨選択は書き換え作業者の判断で行われていたということである。

しかし今回の書き換え実践では、専門知識を持つ学芸員の書いた解説文の原文を学生が書き換えた。作業工程の都合上、書き換えの際には原文の書き手が同席できる状況になかったため、まずは書き換え実践者自身が原文のテキストの重要だと思われる点を読み解き、場合によっては情報を削るという選択が行われた。最終的には原文の書き手である学芸員による添削が行われたものの、草稿の時点で一度学生たちは与えられた情報を自ら取捨選択する必要があった。

出入国在留管理庁・文化庁(2020)のガイドラインで想定されている書き換え文は公用文やそれに類するもの、お知らせ文などであるが、このような文書は読み手に情報を伝える目的が明確であるため、比較的情報の取捨選択がしやすい。文書の目的を果たすために必要な情報以外は削除してしまって構わない。削除したほうが伝えるべき情報が明確に伝わることもある。また、理解を容易にするために原文に書かれていない内容を付け加えることが望ましい場合もある。

一方で、美術作品の解説文の情報伝達の目的は必ずしも自明ではない。極端に言えば、解説文がなくても作品の鑑賞をすることは可能である。一方で、絵画鑑賞においては作品についての知識が重要な役割を果たすことが指摘されている(Solso 1996: 308-310)。また、作品に描かれた対象物や構図、表現方法についての解説文とともに絵画を鑑賞した場合は、鑑賞する際の言語的な活動が促進されることも観察されている(田中・松本 2010)。したがって、作品とともに示される作品解説文は鑑賞に何らかの効果を与えるものだと考えられる。しかし、解説文においては

もっとも重要な情報や解説文が書かれたねらいを非専門家が読み解くことは難しい。

下の表3は、書き換えの一例である⁶。ここでは、情報を大幅に削除するという判断をしている。原文に付した下線は、書き換えの際に削除された情報である。字数にして半分近くの情報が削除されている。削除された情報は、作者の経歴の一部や作品が生み出された歴史的な背景の情報などである。「ちゅうしょうが（抽象画）」の説明に字数を要したこともあり、内容の理解に絵画技法や美術史の知識が必要な情報については割愛するという判断がされている。削除された情報について〈やさしい日本語〉で書くことは不可能ではないかも知れない。しかし、それにはかなり

表3：書き換え例①

<p>作者名, 作品名</p>	<p>小松清 <u>きゅう</u></p>
<p>原文</p>	<p>黒い空間に突然現れた扇型。扇型を横断するように広がる曲線は、川の流れのようにも、時空の裂け目のようにも見えます。</p> <p>タイトルの「穹」という漢字は、弓形やドーム形を意味する漢字です。空をドーム型の天井に見立て、大空を表すときにも使われます。</p> <p><u>小樽は、絵になる風景が多い地域性も相まって、具象的な風景画家を多く輩出してきました。</u>小樽に生まれ、<u>中学・高校在学中から実力を高く評価された</u>小松は、小樽で抽象画に挑戦した最初の画家の一人です。</p> <p><u>1950年代は、戦後の傷のまだ癒えぬ中、復興への希望を抱え、画家たちは新しい表現を模索した時代でした。外国から流入したアンフォルメルやアクションペインティングなど、激しく衝動的な表現が流行し、多くの若い芸術家が前衛芸術に挑戦しました。</u></p> <p>小松にとって抽象表現は、「どのように表現するか」が主題となるものではなく、あくまでも自分の内面を表現する手法の一つでした。</p> <p style="text-align: right;">（※下線は書き換え時に情報が削除された部分で、筆者による）</p>
<p>書き換え後</p>	<p>くろいばしょに <u>おうぎがた</u>が あります。</p> <p><u>おうぎがた</u>の うえに まがったせんが あります。そこには <u>かわが</u> あるようにもみえます。じかんを わけているようにも みえます。</p> <p>このえの なまえには「<u>穹（きゅう）</u>」というかんじが あります。</p> <p>「<u>穹（きゅう）</u>」というかんじの いみは〈ドームのようなかたち〉です。</p> <p>ひろいそらが あるときにも つかいます。</p> <p>このえは <u>こまつ きよしさん</u>が かきました。</p> <p><u>こまつさん</u>は おたるで うまれました。<u>こまつさんは せんや てんを つかって</u> じぶんのことを かきます。このように <u>せんや てんを つかって</u>かくえを「ちゅうしょうが」といいます。こまつさんは「ちゅうしょうが」を おたるで <u>さいしょに</u> がんばって かいしたひとです。</p> <p style="text-align: right;">（※二重線は重複している部分で、筆者による）</p>

⁶ 作品解説の原文と書き換え文は、北海学園大学人文学部日本文学科丸島ゼミが発行している機関誌『紐帯』の第3号から引用している。これ以降に取り上げるものや、学生の振り返りレポートも同様である。

の字数を要すると思われる。時代背景などの知識は作品そのものと直感的に結びつけにくいこともあり、読み手にとってはかなりの負担になると思われる。

一方で、「短く言う」「分けて言う」ことの影響で語句の重複も増えている。上の表3の書き換え文に付した二重線は、重複が起こっている箇所である。これは野沢(2006)でいうところの「のりしろ」に相当するものであり、一般的な新聞などでは避けられる。しかし、文を短く区切ってそれぞれの文を「のりしろ」で繋ぐことで、文章をわかりやすくすることができる(野沢2006:69-74)。

下の表4は、わかりやすさと自然さのために情報が追加された例である。原文では「この絵は、画家の宮川魏の最晩年の作品です。」とあるのを、「宮川魏さんは、56歳の時に亡くなりました。亡くなる前にこの絵をかきました。」のように書き換えており、作者の没年の情報が付け加えられている。原文の「最晩年」は日本語に習熟していない読み手には難しく、言い換えが必要な語彙

表4：書き換え例②

<p>作者名、 作品名</p>	<p>宮川魏《道》</p>
<p>原文</p>	<p>広い野原に通った一本の道。遠く遠く先に、一人の人間と、一匹の動物の姿が見えます。彼らはどこに行くのでしょうか。長く伸びた影。足取りはあまり軽そうには見えません。この絵は、画家の宮川魏の最晩年の作品です。</p> <p>宮川は小樽に生まれ、東京美術学校(現在の東京藝術大学)の油絵本科に入学しましたが、在学中に大病を思い帰郷。一時は絵を書くこともままなりませんでしたが、小樽で若者たちにデッサンや油絵を指導しながら、画業を続けました。宮川は、「もしもまた、生まれ変わる事が出来るなら、今後は健康な体でもう一度絵描きになりたい」と語っていたといいます。</p> <p>宮川の描く風景は、明確な場所を描いたわけではなく、心の中の風景だと言われています。</p>
<p>書き換え後</p>	<p>一本の道が、広いところを通っています。そこにひとりの人と、1匹きの動物が見えます。彼らはどこに行くのでしょうか。</p> <p>長いかげ [shadow] が見えます。彼らは歩きたくないのかもしれない。</p> <p><u>宮川魏</u>さんは、56歳の時に亡くなりました。亡くなる前にこの絵をかきました。</p> <p><u>宮川</u>さんは小樽で生まれました。そして東京美術学校(今の東京藝術大学)に入学しました。</p> <p>しかし、学校にいるとき、大きな病気になりました。だから、絵をかくことがむずかしくなりました。</p> <p>しかし、小樽で若い人に絵を教えて、絵をかく仕事をつづけました。宮川さんはいいました。「また生まれたら、もう一度元気に絵をかく仕事がしたいです。」</p> <p>ここは、本当にある場所ではありません。</p> <p>この絵の場所は、<u>宮川</u>さんの心の中にあります。</p> <p>(※下線は書き換え時に情報が追加された部分で、筆者による)</p>

である。語彙だけを易しく書き換えるのであれば、「この絵は、宮川魏さんが亡くなる少し前にかいた絵です。」のようにすることもできるだろうが、〈やさしい日本語〉では構文を単純にすることが求められる。上の書き換え案は複文構造になっているが、複文は誤読や理解のしにくさを招くため、できるだけ単文で書くことが望ましい。「宮川魏さんは亡くなる前にこの絵をかきました。」という書き換えも可能ではあるが、やや唐突な印象を受けるため、読み手が一読して理解できないおそれもある。没年の情報を加えることで、易しさと自然な文のつながりを両立させている。

下の表5は、わかりやすさのために文章の構成を変更した書き換え例である。それぞれの文書の構成を示すため、筆者が丸数字を加えている。原文では3点の作品が森ヒロコによるものであることを明示した(①)うえで、作品の技法を説明し(②)、森ヒロコの作品の特徴について解説している(③)。書き換え後の文書は①に相当する部分の前に、「^{もり}森ヒロコさんは^{おたる}小樽に^う生まれました。」の一文を加えている(④)。4-2で後述するが、読み手が作者を知らなかった場合を考慮して加えられた一文である。また、作品の技法(②)の前に作品の特徴(③)を置いている。④と

表5：書き換え例③

<p>作者名、 作品名</p>	<p>森ヒロコ《なわとび》、《冬の華》、《燐寸》</p>
<p>原文</p>	<p>①作品はどれも小樽出身の森ヒロコによる作品です。 ②鉛筆やペンで直接紙に描かれたものではなく、銅版から紙に写し取られた版画です。銅と薬品の化学反応を用い、色の濃淡や、繊細な表現を可能にしています。 ③森ヒロコの作品には、天使や、少年少女といったメルヘンチックなモチーフが描かれていますが、そこには甘い雰囲気ありません。登場人物の憂を帯びた眼差しを見つめると、私たちもたちまちその世界に引き込まれてしまうようです。</p> <p style="text-align: right;">(※丸数字は筆者による)</p>
<p>書き換え後</p>	<p>④^{もり}森ヒロコさんは^{おたる}小樽に^う生まれました。 ①森ヒロコさんはこの3つの絵をかきました。 ③^{かのじょ}彼女はよく^{しょうねんしょうじょ}少年少女などのかわいいものをかきます。 しかし、これらの^え絵はかわいいだけではありません。</p> <p>^{かれ}彼らの目を見てみましょう。 その目には、いろいろな^{きもち}気持ちが見えます。</p> <p>②この^{みつ}3つの^え絵は、^{どうはん}銅版^がです。 ^{どうはん}銅版画は^{どう}銅の^{いた}板から^{かみ}紙に^{うつ}写した^え絵です。 この絵は、^{くすり}薬をつけたペンで銅を削っています。 また、^{どう}銅に^{くすり}薬をつけて、^え絵の^{いろ}色の濃いとこ^ろと薄いとこ^ろを変えています。</p> <p style="text-align: right;">(※丸数字は筆者による)</p>

①で作者について述べているため、次は作者の作品の特徴(③)について述べた方が認知的な負荷が軽いと考えられるためである。

以上のように、本実践では情報の加除や構成の変更が多く行われている。〈やさしい日本語〉書き換え時の情報の加除については、打浪・岩田(2019)に詳細な分析があるが、在留外国人や小中学生を対象としたWebニュースサイトのNHK「NEWS WEB EASY」⁷では、原文である元記事から詳細な情報や周辺情報などがカットされていると述べられている。本実践でも同様の情報の削除が行われていることが確認できた⁸。

しかし、書き換え作業者である学生には美術の専門知識がないこともあり、このような書き換えは原文の書き手のねらいにそぐわないおそれもある。原文の書き手が必須と考える情報を書き換え作業者がカットしてしまったり、正確でない情報や不必要な情報を付け加えてしまったり、書き手が豊かな鑑賞の助けとなるように工夫して練られた文章の構成を崩してしまったりすることも考えられるためである。本実践では、書き換え後の文章をさらに原文の書き手である学芸員に点検してもらい、書き換え作業者の学生と数度のやり取りをとおして擦り合わせを行うことでこの点を解決した。しかし、原文のねらいが書き換え作業者には正確に理解できない可能性があるのと同様に、情報の加除や構成の変更を含めた書き換えのねらいが原文の書き手には伝わらないことも考えられる。書き換え時に原文の書き手と書き換え作業者が協働できれば、あるいは原文の書き換えという形ではなくはじめから〈やさしい日本語〉で解説文が書かれれば、専門家のねらいがより反映できる形で〈やさしい日本語〉の解説文が作成できる可能性もある。

4-2. 背景知識の扱いの難しさ

Grice(1989)によれば、我々が会話をする時は会話の目的や段階を踏まえたうえで当を得た発言をしなければならず、これをCooperative Principle(協調の原理)という。この原理は4つのカテゴリーに分類されており、category of Quantity(量の格率)では過不足なく情報を提供しなければならないとされる。Cooperative Principleは会話を想定した原理であると思われるが、過不足なく情報を提供しなければならないのは、会話だけでなく文章を書くときも同様だと考えられる。不特定多数を対象とした書き言葉であっても、そのトピックに対して読み手がどの程度の背景知識を持っているかある程度推測できなければ、どこまでが必要な情報なのかを判断することはできない。

美術館の作品解説文も同様であろう。それが標準的な日本語で書かれていれば、書き手は少な

⁷ <https://www3.nhk.or.jp/news/easy/>

⁸ 打浪・岩田(2019)ではNHK「NEWS WEB EASY」における情報の追加や構成の変更についての言及はない。なお、知的障害者向けの情報媒体『ステージ』の編集手順では情報の追加や文や段落の入れ替えに関する記述がある。固有名詞の数を手掛かりに情報の加除を分析していること、NHK「NEWS WEB EASY」においては難解な語彙はポップアップで語義や解説が表示されることから、記事の本文中に目立った情報の追加が観察されなかった可能性もある。

くともそれが読解できる日本語能力を有する読み手を想定して必要な情報を提供しているものと思われる。より対象を狭めて、作品に関わる背景知識をある程度持ち合わせた読者などを対象にしている場合もあるかもしれない。しかし、前述したとおり美術館は公共性の高い施設であり、さまざまな人が訪れる可能性がある。作品解説文が想定している読み手の範囲の外にいる人に読まれることも少なくないだろう。

標準的な日本語を〈やさしい日本語〉に書き換えるということは、想定する読み手の範囲をより拡大することでもある。原文に書かれている情報が標準的な日本語を理解できる人々を対象としているものであるなら、書き換えの際にはより拡大された範囲の人々にとって必要な情報が何であるのかを考える必要がある。

前述したとおり、本実践では基本的に日本語非母語話者を対象とした〈やさしい日本語〉を念頭に書き換えを行っている。より具体的には日本語を母語としない外国人などが想定されるが、このような人々の持つ背景知識は日本で生まれ育った人の多くが有している知識とは異なることが考えられる。下の表6は、小林多喜二と親交が深かった画家の大月源二の作品の解説文の書き換え例である。小林多喜二が日本のプロレタリア文学の代表的な作家であることや警察に捕らえられて獄中死したことなどを、読み手が知らない可能性を考えて下線部の情報を追加している。「ひまわり」「カンナ」のような花の名前も、読み手の出身地によっては馴染みがないことも考えられるため、注を付して説明を加えている。また、難易度の高い語彙には一部英訳を付している。

打浪・岩田（2019）では、知的障害者向けの情報媒体『ステージ』の編集方式にのっとりリライトされたニュース記事等についても分析を行っている。打浪・岩田（2019）によれば、『ステージ』ではまず編集者がリライトを行い、そのうえで知的障害のある当事者の編集担当者を含めて読み合わせと検討を行い、最終的に編集者が最終調整するという手順で記事の作成が行われている。打浪・岩田（2019）では編集者が最初にリライトした文章（STAGE A）と当事者委員の意見が反映された文章（STAGE B）の比較や、当事者委員が参加した編集過程の録音データの分析も行っている。当事者委員が参加しての編集過程では、背景や具体例に関する説明の加筆が求められるという傾向が観察されていた。在留外国人などを対象にしたNHK「NEWS WEB EASY」に関しては情報の追加について言及されていないが、これは固有名詞をてがかりに情報の加除を分析したことで情報の追加が検出されなかったためであると思われる。また脚注8にあるとおり、NHK「NEWS WEB EASY」は難解な語はポップアップで語義の説明や解説が付されているため、本文中に顕著な情報の追加が観察されなかった可能性がある。

本実践での書き換えは日本語非母語話者向けのガイドラインを目安に行っており、その点ではNHK「NEWS WEB EASY」に近い性格のものであると言える。しかし、情報の加除という観点で見ると、知的障害者向けの情報媒体である『ステージ』と共通する部分も多く見られた。本実践で書き換えられたテキストはニュース記事とは異なり、多くの人が共通の背景知識を持ちにくい分野のテキストだと言える。また、書き換えを行った学生や添削をした筆者は美術の専門知識

表6：書き換え例④

<p>作者名, 作品名</p>	<p>大月源二《走る男》</p>
<p>原文</p>	<p>青空の下、大きなひまわりとカンナの咲くそばをフンドシ姿の男が駆け抜けています。青年は前を見据え、力強く腕を振り上げていますが、周りは高い塀に囲まれています。</p> <p>この絵は、自画像だと言われています。作者の大月源二は、立立小樽中学（現小樽潮陵高校）を卒業後、東京美術学校（現東京藝術大学）に進学し、さまざまな思想・哲学に触れた後、社会主義・共産主義運動の中から生まれたプロレタリア文芸連盟美術部に加盟しました。</p> <p>1932年、28歳のときに大月は治安維持法で検挙、投獄されます。同郷で、『蟹工船』など作品の挿絵を多く手がけてきた小林多喜二の死は、拘留されていた独房の中で知りました。</p> <p>大月は獄中で画風の転換を余儀なくされますが、1935年仮釈放となり出獄。この作品は、出獄した翌年に描かれています。</p> <p>「カラッとした明るさ」があります。青年は、どこに向かって走っているのでしょうか。</p>
<p>書き換え後⁹</p>	<p>あおいそらのした、おおきなひまわり※1とカンナ※2がさいています。そのそばをおどこのひとがはしています。かれはまえをみて、おおきうでをあげています。まわりにはたかいかべがあります。</p> <p>おおつきげんじさんがこのえをかきました。かれはおたるのちゅうがっこうをそつぎょうしたあと、えのだいがくに入りました。そして、プロレタリアぶんげいれんめいびじゅつぶにはいりました。それは、ソーシャリズム [Socialism]・コミュニズム [Communism] うんどうのなかからうまれました。</p> <p>おおつきさんは、こばやしたきじさんのほんのえをたくさんかきました。たきじさんは、「かにこうせん」などのしょうせつをかいたひとです。おおつきさんとたきじさんは、かんがえかたがにいていました。</p> <p>1932ねん、28さいのときに、おおつきさんはほうりつをまもりませんでした。なので、けいさつがかれをつかまえました。つぎのどしに、けいさつはたきじさんもつかまえました。たきじさんはそのまましんでしまいました。</p> <p>1935ねん、おおつきさんはしゃかいにもどりました。そして、1936ねんにこのえをかきました。</p> <p>おどこのひとは、どこかにむかってはしています。どこにむかっているとおもいますか？</p> <p><u>1 ひまわり…なつにのびて、しゅういがきいろで、ちゅうおうがちゃいろのはな</u> <u>2 カンナ…みなみのくにでさく、きいろやあかのはな</u></p> <p>(※下線は書き換え時に情報が追加された部分で、筆者による)</p>

⁹ この書き換え後の文章が全てかな書きで分かち書きもされていないのは、読みやすさやわかりやすさについて来場者が考えるきっかけを作る、展示上のねらいがあったためである。わかりやすさを第一義に考えるのであれば、漢字かな交じり文、ルビ付きの漢字かな交じり文、分かち書きをしたひらがな文を併用するのが望ましい。漢字かな交じり文は、漢字圏出身の非母語話者であれば漢字語が理解を助ける可能性があるためである。また、ルビによる見た目の煩雑さが読みを困難にする可能性もあるため、かなのみの文も必要である。ルビのない漢字かな交じり文は、自動翻訳アプリ等を使う際に活用しやすい。

を有していないことも、読み手の背景知識を推測しにくい要因の一つであっただろう。本実践では、読み手が持つ背景知識を小さめに見積もるという方略を採った。

5. 学生の振り返りレポートより

学期末に、書き換えに参加した学生に期末レポートを課した。レポートには書き換え作業を通して発見したり考えたりしたことだけではなく、〈やさしい日本語〉そのものについて学修したことをまとめたり、次年度の卒業論文の準備に言及しているものもあったため、ここでは書き換え作業について書かれた部分を中心に分析することとする。

5-1. 「日本語表現の鏡」としての〈やさしい日本語〉

庵（2016, 2019）では、〈やさしい日本語〉は日本語母語話者にとって「日本語表現の鏡」としての役割を果たすと述べている。この項では、〈やさしい日本語〉をとおして自分がふだんつかっている日本語や、日本語そのものへの気づきや学びがあったと述べているものについて扱う。

書き換えをとおして自分が普段使っている日本語に無駄やわかりにくさがあると感じたと述べた学生は3名いた。ある学生は「日本語が母語である人にとっては、文章に連用中止を用いることや、間接的な表現や曖昧な表現を使うことは普通のことである。私たちが日常生活で話したり、読んだりする文章にはこういったものがありふれている」のように述べており、〈やさしい日本語〉では望ましくないとされているあいまいな表現などが標準的な日本語には多く使われていることに、〈やさしい日本語〉をとおして気づくことができたことがわかる。ほかの学生は「やさしい日本語化したことで、逆に文章を分かりづらくしている曖昧表現や余計な文章が明確に表れた」「日本語を母語とする日本人が文章を分かりやすく伝えるために、やさしい日本語を活用することは非常に有効である」のように書いており、〈やさしい日本語〉が母語話者の文章作成の技術としても有用であると考えたようである。

〈やさしい日本語〉で書くことをとおして、特に伝えるべき内容や文章の重要な点をつかむことの重要性に触れていた学生は4名だった。ある学生は「やさしい日本語を使って「一番伝えたいことは一体何なのか」ということも見極めることも重要なポイントである」と述べている。別の学生は「文が長くなると、結局何が言いたかったのか分からなくなる」のように書いており、伝えるべき重要なポイントを理解し、それらを簡潔に伝えることの重要性を感じていたことがわかる。さらにほかの学生は「誰にどの程度伝えたいか」、「どこを一番伝えるべきか」というめどを立てることの重要性」についてまとめている。その「めどを立てる」基準としては、「美術館に来る人がどのような人物であるかを想像し」と述べており、具体的な読み手を想像することで伝えるべき内容を判断していたということである。このような工夫は、ふだん標準的な日本語で文章を書く際にも活用できる可能性が高い。

また上の学生以外にも、書き換えを行う際に他者の視点に立つ重要性に気づいたと述べている学生が2名いた。非母語話者とペアを組んで書き替えを行った学生は「自分の中で迷ったときや、

困ったときは相手の視点に立つことを心掛けた」と述べており、さらに「私の相方の母語が日本語でなかったため、その視点が非常にためになったし、やりやすかった」とも述べており、非母語話者の視点を取り入れながら書き換えを行っていたことがわかる。

これらの学生は、自らの日本語表現を〈やさしい日本語〉を用いて相対化することで、文章を書く際に留意すべきことや、読み手の立場に立つことの重要性に気付いたと言えるだろう。上で挙げた以外にも、〈やさしい日本語〉の書き換えには日本語の語彙力が必要だと述べている学生もおり、日本語で書くことの訓練になったと感じた学生が多かったようである。これらの気づきは丸島(2022)の実践の感想文の分析から得られた概念的カテゴリーである「他者の立場」「ことばに対する学び」「内容への理解」と共通するところがあり、これらの点については宇佐美(2019)の内発的動機を促す活動の3要素の一つである③(単に知識や技能が習得できるだけでなく、自己の問い直しにもつながる)を満たしていたと言える。

5-2. 本実践の特徴に関連する気づき

つぎに、4節で述べた本実践の特徴について言及しているものに触れたい。他者の書いた専門的な文章の書き換えの難しさに言及していた学生は3名いた。

ある学生は、日本語学習者向けのボランティアに参加するなど、学習者との接触が比較的多い学生だったが、「今回の課題は、自分で考えた言葉の変換ではなく、他の人が考えた言葉、ましてや、専門的な用語や、日本人でも難解とを感じる言葉を使用した文章が多かったために苦戦した」のように自身の書き換えを分析しており、専門家が書いた文章の書き換えの難しさについて触れている。別の学生は「美術館の説明はどうしても専門的な用語が出てくるので、「やさしい日本語」で説明しようという意識だとどうしても元の文章の方がしっくりくるように感じてしまうことがあった」と述べている学生や「美術に対しての知識がなかったため、専門用語の変換や実際に絵を見て、それを言葉に表すことが難しかった」と書いた学生もおり、やはり専門性の高い文章の書き換えに苦心していたようである。

この3名のうち2名は5-1項で述べた「特に伝えるべき内容や文章の重要な点をつかむことの重要性」と「他者の視点に立つ重要性」にも触れており、まず原文の重要なポイントをとらえ、読み手について具体的にイメージすることでこの困難さを乗り越えたと思われる。この2名のうち1名の学生は、「展示者側が伝えたい内容と、作品を見る側が知りたい情報との間に立って難しさを緩和する」と述べており、読み手と原文の書き手を繋ぐ役割を担っていたという認識も持っていたと見られる。

書き換えを行った学生たちは演習授業開始時には美術鑑賞に関心はなく、本実践は宇佐美(2019)の「①参加者自身の人生と relevant である」を満たすものではなかった。そのこともあって、学生たちは書き換えに困難さを感じたようである。しかし、だからこそ実践のなかで自らの役割や、単に必要な情報を伝えるだけではない〈やさしい日本語〉のあり方について模索する活

動に繋がったものと思われる。

6. 展 望

本特別展の主旨は、美術館の「やさしさ」について考えるきっかけを作ることであり、その対象には日本語母語話者も含まれている。書き換え実践を行った学生たちのうちの何名かは、〈やさしい日本語〉の書き換えが母語話者の学びにもつながると述べており、「やさしさ」がふだん意識することのないものを相対化することで、新たな視点や気づきを与えたと言えるだろう。学生の振り返りレポートに書かれた範囲では、学生たちに本特別展の来場者が「やさしさ」を再考する仕掛けを作ったという意識はなかったと思われるが、学生自身が読み手の立場に立つことで「やさしさ」を考えるきっかけになったと考えられる。

その一方で、この実践には課題も残った。それは、学生と〈やさしい日本語〉を必要とする人との接触の機会を設けることができなかつた点である。ゼミには2名の非母語話者が参加していたが、いずれも中上級レベル以上の話者であり、初級レベルの日本語を必要とはしていない。一部の学生たちは振り返りレポートの中で相手の立場に立つことを意識していたと述べていたが、接触の機会の少ない中でそれを行うのは非常に困難であつたと思われる。この点については非母語話者である学生も「日本人と日本語上級者にとって、教育者として需要者との接触、または初級者を教える経験が日常的にないと、この文を何と言ひ換えればいいか、適当なことが思いつかない」「需要者と接触する機会を作ること大事だと思う」と、具体的な読み手との接触の必要性に言及していた。大学という場で初級レベルの学習者等と交流の機会を持つことは容易ではないが、近隣の日本語教育機関と連携するなど、工夫の余地はある。今後の課題としたい。

謝 辞

美術館展示に関わる機会を与えてくださった市立小樽美術館の山田菜月氏、書き換えにあつてアドバイスをくださった島根県立大学の三成清香先生に感謝申し上げます。

また、本研究は2022年度北海学園大学学術研究助成（個人・一般研究）の助成を受けたものである。

参 考 文 献

- Grice P (1989) *Studies in the Way of Words*. Massachusetts: Harvard University Press.
Solso, R. L (1996) *Cognition and Visual Art*. Massachusetts: MIT Press. (ロバート・L・ソルソ 鈴木光太郎・小林哲生(訳)『脳は絵をどのように理解するか—絵画の認知科学』新曜社)
庵功雄 (2016) 『やさしい日本語—多文化共生社会へ』岩波新書。
野沢和弘 (2006) 『わかりやすさの本質』NHK 出版。
吉開章 (2020) 『入門・やさしい日本語—外国人と日本語で話そう』アスク出版。
吉開章 (2021) 『ろうと手話—やさしい日本語がひらく未来』筑摩書房。

- 安東明珠花・岡典栄 (2019) 「ろう児と〈やさしい日本語〉」庵功雄・岩田一成・佐藤琢三・榊田直美 (編) 『〈やさしい日本語〉と多文化共生』 257-273. ココ出版.
- 庵功雄 (2019) 「マインドとしての〈やさしい日本語〉」庵功雄・岩田一成・佐藤琢三・榊田直美 (編) 『〈やさしい日本語〉と多文化共生』 1-21. ココ出版.
- 打浪文子 (2019) 「知的障害者の情報保障と〈やさしい日本語〉—一般社団法人スローコミュニケーションのとりくみを例に」庵功雄・岩田一成・佐藤琢三・榊田直美 (編) 『〈やさしい日本語〉と多文化共生』 225-238. ココ出版.
- 打浪文子・岩田一成 (2019) 「やさしい日本語化と情報の加除—NHK ニュース, NHK 「NEWS WEB EASY」, 『ステージ』の比較」庵功雄・岩田一成・佐藤琢三・榊田直美 (編) 『〈やさしい日本語〉と多文化共生』 239-256. ココ出版.
- 岡典栄 (2015) 「ろう児への日本語教育と「やさしい日本語」」庵功雄・イヨンスク・森篤嗣 『「やさしい日本語」は何を目指すか』 299-319. ココ出版.
- 杉本篤史 (2019) 「言語権の観点からみた日本手話とろう教育」庵功雄・岩田一成・佐藤琢三・榊田直美 (編) 『〈やさしい日本語〉と多文化共生』 257-273. ココ出版.
- 田中吉史・松本彩希 (2010) 「絵画鑑賞における解説文の効果」『日本認知科学会第27回大会発表論文集』 347-349.
- 丸島歩 (2022) 「大学生による〈やさしい日本語〉コンテンツ作成の試み—振り返り感想文の分析を中心に」『人文論集』 73, 53-69.
- 出入国在留管理庁 (2023) 「令和4年末現在における在留外国人数について」 https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00033.html (閲覧日: 2023年6月29日)
- 出入国在留管理庁・文化庁 (2020) 「在留支援のためのやさしい日本語ガイドライン」 <https://www.moj.go.jp/isa/content/930006072.pdf> (閲覧日: 2023年8月18日)